

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (4)

—— 1924年6月1日～7月31日 ——

小池辰雄

○1924年6月1日 (日)

晴天。午前、帝大の運動会を見物に行った。かなり面白かった。水戸出身の石井が走高跳で新記録を作った。1m70。帰宅したら

『基督の復活』ゴードー著、小池政美訳

が出来てとどいていた。藤井先生のお骨折に只管感謝する次第である。午後から藤井先生のお宅へ御礼に上った。高島の伯母様のお宅も御礼に上った。先生のおよろこび、僕の感謝。本当に先生の御親切と御尽力には何とも申し上げようがない。逝ける兄上も嘸^{さぞ}喜んで居られることと思う。先生に感謝して居られることと思う。

僕も大いに先生のために尽くさねばならぬと思った。先生のためにも、召されたる兄上のためにも皆、主のためである。基督者のよろこびである。

先生も言つて下さった様に、僕は先ず身体を丈夫にしなければならぬ。そして僕の身体の丈夫になるのはその原^{もと}は精神の健全にあるから一層その必要なるを感じるのである。身体の不健康は僕の場合にあつては精神の不統一、不信仰を表わすものである。

節食主義、菜食主義、規則的生活、信仰を本として。

○1924年6月2日 (月)

驟雨あり。夏らしい天気になって来た。昨日、ローハードル200mで林が27秒5分の3と云う帝大新記録を作った。かなり暑くて日中は74、75度である。今朝、宇都宮の兄が帰宇された。

ジャガイモで育つ僕、太れ太れである。胃腸アトニー症も神経衰弱もとんで行け。我は頼らじ、人に問わじ、人を当てにせじ。我が友は上にあり、我が友は中にあり。我はそれにて足れり、強し。

○1924年6月3日 (火)

晴天。起床6時40分。朝食が美味しい。冷水摩擦は欠かさずやっている。1922年9月22日より、中止したことは(已むを得ず)度々あったがまず続けてやって来た。母上をお伴れして中渋谷の高島のまま様のお家へ行った。色々とお話をした。お昼を御馳走になった。とても食べられないと思っていたのが、鰻井を一つ完全に平らげたのには自分ながら驚い



た。それから藤井先生のお宅へ三人で今度の兄上遺稿出版の御礼に伺った。実に先生の御尽力には感謝のみである。先生は、

「今度の出版は自分の著書が出版されたより嬉しい」

と云って下さった。心からよろこんで下った。兄上はさぞ天に喜び感謝して居られることであろう。

先生のお眼の度が進まれ、遠からず失明とうかがっては、衷心より御同情、御心配申し上げる。先生は全て信仰によつてのみ生きて居られる。神の作り給いし、精巧緻密なる眼に人の手を加えることをこのまないと云われて、医者の手をかりることを快しとなさらない。先生は飽くまでも光の子で居られる。先生に接することによりその御人格、御信仰に敬服せざるを得ない。

先生は今度の出版に関し全部を引き受けて下さった。僕も先生に倣つて信仰のみに生きたくある。人に頼る間は駄目である。物に頼る間は駄目である。人は神の御旨に従つて生きる。やがて先生の御手伝でもする身になりたいものである。それには大きな努力勉強を要する。先生は非常なる読書家で居られる。精力家で居られる。著述家、文人で居られる。先生の文章には実になんとも言えぬ香がある、力がある。それは皆、先生の敬虔なる信仰と人格とに原を発しているのである。先生は、

「眼が非常に痛んだので、2、3日断食の思いをして読書を排した」

と云われた。それほど読書の方である。書が最良の友で居られる。先生の書齋は宗教書で一杯である。実に清き香に漲つて、自然と心が清められる感がある。ダンテとルーテルの肖像が掲げてある。

机上には、貴き奥様の御写真がある〔註：妻喬子は1922年10月1日に病没〕。聖書が多くある。その中に兄上のギリシヤ語の聖書もある。誠に誠にただただ、ああ、先生なる哉！と感服するのみである。先生は眼鏡をはずすと何ものも見分けがつかぬと仰った。先生はかくも聖書研究、伝道著述のために熱心で居られる。

帰宅したのは4時半頃であつた。四郎ちゃんが間もなく来られた。晚餐は、青豆の御飯であつた。実に美味しく戴いた。四郎ちゃんと一緒にお風呂に入った。9時半頃まで遊んで帰られた。

藤井先生も高島の伯母様も、僕の身体のために御注意下さった。深く心にとめて主の御業に務めなければならぬ。兄上は逝けり。我は残されたり。この世の旅を終るまで命に従いて走らん。而して再会を待たん。『基督の復活』の本のスケッチあり」

○1924年6月4日 (水)

晴。午前、在宅。予定の如く暮らした。青木の叔母様、武田の叔母様、来られた。3時半頃まで居られ、母上と買物に行かる。鋤(手製の)で土をならした。いい運動である。



○1924年6月5日 (木)

曇。御成婚奉祝当日である。午前、神保町の岩瀬様のお宅へ『基督の復活』を一民様の御霊前に捧げる様に差し上げた。それから大手町、馬場先門まで行つた。大変な人出である。花電車を3台ほど見た。神田の丸善でローエルの詩集を買つた。今日の記念に。

今日は愛子の正月命日に偶然にも当たっている。

〔註：妹愛子、1914年6月5日召天（9才）。「妹愛子は高師附属小学校二年生のとき猩紅熱にて病死。その頃私は妹と本郷西片町から通学しており、私は同じ時に腎臓炎をわずらい、母はしばらく妹の死を私に語りませんでした。その後間もなく学校に近い小石川同心町に転居したのも、私の虚弱を慮つての母の愛によることでした。」（著作集第六卷『随想集』「第三部母上の生涯」より）〕

帰宅2時、ジャガイモとそらまめを沢山食べた。青木へ母上を御むかえに行つた。晩はお赤飯をお祝した。初キヤベツを戴いた。市ヶ谷小学校へ一寸活動を見に行つた。花火も盛んに上げられていた。終日曇つていて、時々細雨が空気を潤していた。

辰雄よ、信仰に生きよ。汝の一動一動は皆その源を信仰に置きてなせよ。一言一句は皆、信仰より之を発せよ。時は常に新たなり。汝の生命もその如く常に新たに信仰へ、信仰へと進み行けよ。凡ては信仰なり。動ずるなかれ。千代経し磐に頼りて在れ。耐え忍びて汝の生命を全うせよ。神よ、御力を与え給え。独り立たしめ給え。信仰のよき戦を戦わしめ給え。アーメン。

○1924年6月6日 (金)

曇。南先生に診て戴く。先月から丁度1貫目〔3.75kg〕増えていた。それで10貫〔37.5kg〕である。まだまだである。それでも段々回復して行くは感謝の至りである。南先生の御親切をその医薬の功以上に戴く先生の御心で癒つたのであろう。僕の信仰がもっと強固なものならもっと回復は速やかであつたろう。これから速やかならしめねばならない。

処方箋を戴く。

結晶重炭酸ナトリウム 3.0

ホミカ越幾斯 0.06

タカヂアスターゼ 1.0

乳酸カルシウム 0.7

次硝酸蒼鉛 0.7

メンタ油糖 0.3

右為、1日量分3包、毎食後1時服用。

神に帰れよ、辰雄！

勤めよ、励めよ、辰雄！



歩め、歩め、彼の途を。

信仰の善き戦を戦え。

信仰。節制。読書。

○1924年6月7日 (土)

曇。降りそうで降らないのがこの頃の天気である。今日は母上をお伴れして山本の家へ行こうと思ったが、そんな天気で行くこと出来ず、僕だけで行つた。富美ちゃんに兼ねてからのお約束の洋服を上げた。3人にお土産をやつた。1時間あまりで振り切つてお暇して来た。子供等に可愛そうであつたが。

庭の手入れをした。朝顔が大きくなつた。コスモスもかなりのびた。スイートピーは少し不出来である。ポピーは甚だ疑わしい。棚や包丁や木戸や何やかや、拵^{こしら}えたり繕つたりした。大工の真似がうまいので家で重宝がられる。そして自分はいい運動になる。一挙兩得である。晩は美味しく戴いた。近頃は菜食主義である。御飯が第1、次が野菜、魚肉は第3、牛豚肉は第4である。菓子は第5、果物は時々よし。この頃はことに、そらまめ、きやべつ、じゃがいもが美味しい。しかし食は之を神が与え給う。思い煩う勿れである。

我ががなすべきは信仰の行である。愛の言行に生きねばならない。宗教書を研究、読書しなければならぬ。読書の習慣を養うこと。節制と規則正しきこと。凡そ信仰のあるところ過なしである。

今日の問題、対米排日問題は遂にかくまで真面目になつて来た。喜ぶべきことである。

〔註：新聞記事の切り抜きの貼付あり。「キリスト教の団体も米国の排日に憤起。内村小崎植村の三氏が手を握り純日本的キリスト教を創建。アメリカの没義道な排日法はいちじるしく日本人牧師の反感を挑発し従来アメリカの援助をうけていた教会もこの際断乎として関係をたちここに純粋な日本的キリスト教を創建せんとする運動が起こつた、主催者は明治13年来不覇独立の壇上に立つて精神殿堂を高唱してきた内村鑑三氏をはじめこれまた殆どアメリカとの関係を有せぬ靈南坂教会の小崎弘道氏、東京神学社の植村正久氏等である、三氏ともそれぞれ立場がちがつているが国家非常の場合にあつて互いに確執すべきものでないと精神的なきたい握手をしたもので来たる13日靈南坂教会で全国的な大同団結に関する打合せをする事になった。〕

節食すること。間食禁止。読書。規則正しき生活。精力善用。乱費(精力)は神経衰弱を招く。適度の運動。目覚めよ、我が魂、心励み……。

○1924年6月8日 (日)

曇。ペンテコステ。午前は冬の様、午後は春の様、夜は秋の様な天気。今日はペンテコステである。午後、青木に行く。平口さん、母上と帰る。皆様が僕の水戸行きを喜んで下さつ



た。

まごころもて 仰ぎまつらん 呪ひの
木にかかりて 死に給ひし

救の主 我が主よ。

わが罪科 けがれも皆 洗ひて

今よりのち きみのものと

なさせたまへ わが主よ。

いともあつき めぐみをもて ひえたる

わがところに 清けき火を

もやし給へ わが主よ。アーメン。

1924年6月8日、ペンテコステ。

○1924年6月9日(月)

曇。7時起床。母上様と朝食を戴いた。12時25分発の列車で帰水した。桐寮に着いたのは5時であった。入浴。夕食はじゃがいも。蓄音機を聞きに3人の来客があった。夜は静かである。桐寮は3人である。

我、水戸に來たりしは信仰を試みられんがためなり。神よ、願わくは深き聖旨を慎重にうかがわしめ給え。アーメン。

今朝、母上様に『基督の復活』を読了して差し上げた。

Golden Rule

A.M. 6:30 起床、Prayer〔祈り〕、冷水摩擦。聖書、詩篇、箴言、英詩。

A.M. 7:30 ～ 7:45 朝食、P. 静かに。

P.M. 0:10 ～ 0:30 昼食、P. 静かに。

P.M. 3:00 ～ 5:00 Exercise、運動。

P.M. 5:30 ～ 6:30 夕食、P. 静かに。

P.M. 7:00 ～ 9:00 独逸語。

P.M. 9:00 ～ 10:00 聖書、宗教書、日記。Prayer、就寝。

節制、規律、読書、運動。信仰の善き戦を戦え。

Mens sana in corpora sano.〔健全な精神は健全な身体に宿る〕

Fasset eure Seelen mit Geduld.〔汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし〕

○1924年6月10日(火)

曇。梅雨のけはいが現われて來た。この頃数日、日光に浴したことがない。どんより曇つて、時々、雨が降る。そしてうすら寒い。



我が水戸に來たりしは我が信仰を試みられんがためなり。神よ、願わくは深き聖旨を慎重にうかがわしめ給え。アーメン。

○1924年6月11日(水)

曇。今日から梅雨期に入った。梅雨らしい天候である。夜はなかなか寒い。信仰の善き戦を戦え。心清くあれ、正直なれ、正しかれ、LutherのTable-Talk〔ルッターの卓上談話〕を読み始めた。近頃、英、独の力のないのを痛感する。読書読書である。

節制、規律、読書、運動。忘れろ、棄てろ、Humble、Pure。

胃腸アトニー、飛び去らん。神経衰弱、逃げ去らん。

○1924年6月12日(木)

曇。神赦し給う。我、東京に帰る。信仰の聖戦をなさん。神、力を与え給う。神の鎧を着て戦わん。神この罪を最後となし給う。神赦し給う。我感謝す。神をわが武器として我何ものをも征服せん。神よ我が口の禍を赦し給え。我が臍を固めしにより神に願ひ奉れり。

○1924年6月13日(金)

曇、雨。汝、貪る勿れ。汝、その罪は絶大なり。汝、その浪費は甚大なり。汝、迷うなかれ。汝、二物に仕う能わず。

○1924年6月14日(土)

曇、晴、雨。午前、神楽坂、九段、『新生』と『聖書の研究』を買った。午後、白井さんと、西島さんへお使いに行く。政矣さんと話す。午後7時からの帝大学友会春季大演奏会を聴きに行った。始まったと思ったら電灯が消えた。それで蠟燭を30数本点じて演奏をした。聴者の方はまっくら、返って落ちついて、いい音楽会であった。10時、終演。

明月煌々と輝き何とも云えぬ気持であった。帰宅10時半。食事をした。夕飯である。実に美味しかった。しかし、寝がけで腹のおちつきがよくなかった。入浴、寝に就く。

○1924年6月15日(日)

曇、雨。梅雨期にしては蒸し暑くなく、そんなに降雨もなく楽である。吉彌さん、礼ちゃん、おぼさんが出て來られた。突然で驚いた。おぼさんはおとまり。兄さんが帰って來られた。賑やかだった。生きたえびの天ぷらは実に美味しかった。

○1924年6月16日(月)

晴。早起。ボートを漕ぎに行った。8時帰宅、朝食の美味しかったこと。庭をたがやす。



午後、南先生のお家へお礼に行く。柳沢様来らる。長崎カステラの顔を見ただけでお使物に廻されたは悲観。斎藤様から、赤倉へ行けるとのことを言いに来て下さって、嬉しかった。今年の夏行くところもこれで定まった。

今日は兄上と何年ぶりか、球抛をして、昔、長兄と球抛を同心町の家でしたことが思い出されて実に何とも云えぬ懐かしき感に打たれた。愉快でもあり、涙ぐましくもあった。愉快な一家の団欒あり、夕飯は愉快であった。

汝、貪る勿れ。汝、盗むなかれ。汝、その日その日を信頼による信仰に生きて暮らせよ。然らばこの月の終りの収穫は誠に大にして感謝なるものならん。

主よ、われと共に在ませ。アーメン。

○1924年6月17日(火)

晴、雨、晴。午前6時起床。兄上、7時宇都宮へ帰らる。庭にヘチマとひまわりと朝顔とセンナリびょうたんの種子をまく。朝食をいただく。午前、勉強。母上に新聞を読んで上げる。庭で薪木をわる。午後、運動、お使い。学校へ届を出す。3時頃、お腹が空いてお握りをたべる。

霊の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、善良、忠信、柔和、節制。

「²²されど御霊の果は愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・²³柔和・節制なり。斯かるものを禁ずる律法はあらず。」(ガラテヤ5：22～23)

○1924年6月18日(水)

晴後雨。午前、九段へ行く。神保町まで足をのぼす。12時帰宅。母上と昼食を戴く。午後、物置を掃除する。薪木を3束作る。夜、入浴。肉は未だ食べられないので、シチューの汁だけを戴いたが、その油のとけたものだけあって、どうもお腹にしつかりしない。

○1924年6月19日(木)

晴。今朝、下痢をなす。誠に不注意なことであつた。シチューはやめよう。

主よ共に在ませ。アーメン。

まごころもて あふぎまつらん のろひの

木に懸かりて しにたまひし

すくひぬし わが主よ。

わがつみとが けがれもみな あらひて

いまよりのち きみのものと

なさせたまへ わが主よ。

いともあつき めぐみもて ひえたる



わがところに きよけき火を
もやしたまへ わが主よ。

世のやみぢに ゆきなやめり くらしを
ひるにかへて めぐみの日を

てらしたまへ わが主よ。

死のかはなみ うちよすとも やすけく

御手によりて あまつきしに

つかせたまへ わが主よ。 アーメン。

真剣なる辰雄に帰らしめ給え。

主よ、我が霊を甦らしめ給いて、御手もて導き給え。ただ主のみ。アーメン。

主に在りて真の勇者と成らしめ給え。主、我と共に在り。午後5時。「十字架と百合の花のスケッチあり」

○1924年6月20日 (金)

晴。梅雨霽れの天気である。『偉人の青年時代』を読んで奮闘の生涯の如何に貴きかをしみじみと感じた。人間は奮闘せざるべからず。人間は苦しまざるべからず。そこに初めて真の生命と幸福と希望とが得らるるのである。主、我と共に在^いまして働き給え。アーメン。

○1924年6月21日 (土)

晴。至極順当な梅雨である。午前は少し勉強した。午後から九段の向山堂へ行った。随分暑かった。『旧約と新約』1号から16号まで整えて置いてもらった。1、2、4、12をのぞいて全部をつた。それから、アルバムを買った。帰宅したのは6時少し前。夕飯前に入浴。とろろの大好物、実に美味しく戴いた。それから九段の帰りに神楽坂で白百合 (鉄砲百合) を買った。それを早速、庭へ下ろした。夜、宇都宮の兄が帰って来られた。

○1924年6月22日 (日)

晴。実に輝ける天気であつた。早起、庭の草花に水をやった。百合が6輪その1輪は咲き、蕾の中にも将に咲かんとしているものもある。母上様を若松町までお送りして来た。平口様と駒込の教会へ。今朝は、パンを半斤にお粥を1杯、われながら驚いた。兄上の御命日である。桜んぼをお供えして皆で夕飯後に戴いた。白百合は更に1輪、咲いた。蕾も見ると見る大きくなって行く。毎日毎日庭を手入れしているので、瓦だらけの荒土の庭もよほど庭らしくなった。姉さんと壽子さんと喜美ちゃんを写真に撮った。庭の百合の側で。昨日は、おばあさんときみちゃんとをとった。

午後から写真ばりをやった。兄上様の御命日に兄上様の遺れる写真を張るのは意義ある、



たのしきことであつた。よき記念物として長く拝見して慕いまつるのである。我がたからまた友である。これによりて、なぐさみを得、また励まさるることと思う。今夕、宇都宮の兄、帰宇された。入浴。よき日であつた。

神よ、わが肉体を健全となし給え。神の聖旨に慕進、服従し奉らん。

我もはや生けるに非ず、キリスト我に在りて生けるなり。アーメン。

うるはしの白百合 ささやきぬ昔を

エスキみの墓より 出でましし昔を。 白百合を見て。

我がために一星輝けり。過去の罪はいかにもあれ、主よ、我は主のものなり。

願わくは、更に更に、どこまでもどこまでも、主に。主によりて。アーメン。

母上に毎夜毎夜、詩篇と箴言とを読んで差し上げる。神よ、11貫に向かつて突進。

○1924年6月23日(月)

晴。暑気甚だし。午前、『旧約と新約』第1巻から第16巻までをとりに行く。九段の向山堂に頼んで置いた。1、2、4、12号の外は皆あつた。写真ブックを買った。帰りがけ、神楽坂で下車。花屋をはからずも見付け、その百合が美しかったので、暫し見ていた。

○1924年6月24日(火)

晴。今日は随分暑かつた。午後1時頃、井ノ頭公園へ行った。人は稀である。写真機をたずさえて。池にスワンの泳いでいるところを撮った。清水が滾々と湧いていた。ベンチ、そのベンチは一昨年も昨年も井ノ頭へ散歩したときに腰掛けたものである。その中に横になつて、池をながめたり、本を読んだり、睡つたりするのは実に心地よかつた。1時から6時まで、よくも池畔に逍遙したものだ。6時、それは丁度、『旧約と新約』「唯この一事をつとむ」7号を読み終つたときであつた。帰途についた。夕陽が正に春^{はる}かんとしていた。電車が丁度やって来た。これにのりおくれればそれから30分待たねばならなかつたのだ。中野で途中下車して、山本へ立ち寄つた。義坊と隆坊とをうつしてやつた。帰宅9時近く。よき散歩の一日であつた。藤井先生の御本実^{まこと}に有難く拝見した。

○1924年6月25日(水)

晴。地久節。佳日である。また武田の叔母様の御誕生日である。午前、銀行へ行った。午後からお祝のつもりで、僕は花(マーガレット)を持って、青木の叔母と母上と共に行つた。ところが叔父様も叔母様もお留守だつた。その中に四郎ちゃんが来られた。夕方、お暇して帰つた。帰途、西大久保の停留所側の鰻屋で母上、叔母様、四郎ちゃん、僕と4人で今日の佳日をお祝した。というよりも、今日の佳日にお祝して戴いた。美味しく戴いた。



○1924年6月26日 (木)

今日は、大森の川上の叔母様の御家へ母上と共に参上した。午前天気は疑わしかったが出掛けた。遂に降らずに済んでよかった。お昼は御馳走になった。山へ2度散歩に登った。帰宅6時。

○1924年6月27日 (金)

曇、驟雨。九段へ散歩に行った。斎藤様へ遊びに行った。源平碁などして遊んだ。

○1924年6月28日 (土)

曇。この2、3日は涼しい。今日は午前は静かにしていた。午後は、はからずも斎藤様にお誘われ^{さそ}て鶴見の花月園へ行った。よき散歩をした。子育饅頭の土産を持ちかえる。公園には色々な遊び道具がある。電気自動車とかいうものにもレン子様のお相手に乗った。レン子様に写真をとって上げた。空腹を感じたため、夕飯は実に美味かった。

今年も半ば過ぎた。来るべき半年を希望のうちに。宇都宮の兄帰る。帰宅後、斎藤様のお風呂に入る。斎藤の伯父様、叔母様、レン子様と4人で。

○1924年6月29日 (日)

晴。午前、佐藤六ちゃんと母上と3人で駒込教会へ行く。三弦さんが来て居られ、青木へ行く。泰ちゃんとボールを抛げる。4時頃帰宅する。武田の叔母上様が来て居られた。桜ンボを持って来て下さる。神楽坂へ写真をたのみに行く。バタ屋に傘を忘れて来た。夕飯は美味しく皆で戴いた。8時の汽車で帰られた。それから神楽坂へ傘をとりに行き、散歩をして10時に帰った。夜店で初めて買物をした。そればスワン万年筆である。50銭。だまされたと思って。ところが案外よいのでおかしかった。

○1924年6月30日 (月)

晴。母上と南先生の御家へ行く。大層よくなったと云われた。神経衰弱は殆どなしと。半年は過ぎた。夢と怠惰と誘惑と蹉跎の中に過ぎた。しかし神の御手は辛くも僕にかかって居た。迷える羔は救われんとして居る。しかして後の半年が迎えられんとしている。

福なる哉、辰雄、汝は希望に生きよ。明朝、歓び歌わん。

神よ、ますます御光を顕わし給え。アーメン。

